

文化女大家政 ○岩崎房子 田村照子

(株) ジャネット 石丸寿代

〈目的〉靴は外部環境の種々の危険や寒暑から足を保護したり、体重を無理なく支え、歩行を有利にする働きを有し、足の健康維持に果す意義は大きい。この様な機能を有する靴を設計・製作するに際しては、足部形態の把握が必要であり、特に成長期にある学童においては足型と共に成長量の研究が要求される。本研究は、小学校1年生(満年齢6才)～6年生(満年齢11才)に至る6年間の男女の個体追跡による足部の縦断的計測を行い、個成長の様相について検討を加えた。

〈方法〉被検者は神奈川県川崎市に在住する、公立小学校に1986年入学の児童で、1991年4月まで在籍した6才～11才までの男子39名、女子48名計87名である。測定項目は足長、足幅、足囲、母趾角の足部4項目及び身長、体重、胸囲、座高の計8項目である。身長、座高、胸囲、体重、足囲は直接計測法により測定し、足長、足幅、母趾角は日本靴総合研究所製スクライバーにより採取した足部の外郭図から間接的に計測した。

〈結果〉1. 足長、足幅、足囲は男女共に加齢に従い有意な寸法増加がみられた。2. 足長、足幅、足囲の性差は足長を除き、足幅、足囲共男子が女子よりどの学年においても有意に優れていた。3. 身長/足長比は7、8才までは減少傾向を示し、その後一旦増加するが、以後変化は少なかった。一方、体重/足長比は加齢とともに漸増し足長1cm当りが支える重量は増大した。4. 母趾角は5、6年で男女間に危険率5%水準の有意な差がみられ、女子の母趾角は4年、5年にかけて増大した。5. 足長、足囲は過去40年間で大きく増大し、足幅は殆ど変化せず、足部形態は時代とともに、細長型になる傾向がみられた。